



指さしとコミュニケーション

まだまだ暑い日が続いていますが、日陰で感じる風にはさわやかな心地よさがあり、季節は確実に秋に向かっていくんだなと思います。

さて、今回は初期のことばの発達についてお話しましたが、今回は指差しからことばや心の発達についてみていきたいと思っています。

指差しの発達

ことばにも発達の段階があったように、指差しにも段階があり、5つに分けることができます

- ① 指向の指差し (9・10ヶ月～)
「わんわんだよ」と言われて、指差された方向を見る。
- ② 自発の指差し (11ヶ月～)
見つけたものを「あっあつ」と言いながら指差す。
- ③ 要求の指差し (1歳～)
自分の欲しいものをしきりに指差す。
- ④ 叙述の指差し (1歳～1歳6ヶ月)
何かを見つけた時に、「あっあつ」と言いながら指差し、母親(養育者)を振り返る。
- ⑤ 応答の指差し (1歳6ヶ月～)
「車はどれかな？」に指差して教える。目の前にいなくても、「お母さんはどこ？」に答えて、いる方向を指差す。

9ヶ月革命

聞かれたことにちゃんと指差しで答えられるかは、特に1歳半健診を迎えられるご家族は気になるかもしれませんが、指差しのはじまりである「指差された方を見る」事って、気にしたことありますか。

指差された方を見るということは、指差しがどんな意味を持っているのかを理解していることだし、相手の働きかけに応じる力の発達が関係しているので、とても大切な力なんですよ。

「9ヶ月革命」という言葉を聞いたことがありますか？赤ちゃんが9ヶ月～12ヶ月頃までに、行動を劇的に発展させることを言うのですが、指差しの理解はこの革命の最初の1歩なのです。

M.トマセロによると、指差しの理解は共同注意・関心と呼ばれるものの成立を意味し、「9ヶ月革命」を経てことばを獲得していくと説明しています。ことばの獲得には、指差しの理解は不可欠なのです。

関係性の発達

赤ちゃん人と人物との関係性にもそれぞれ名前がついていて、二項関係、三項関係というように発展していきます。自発の指差しの頃、何かに興味を示し気持ちが動くことで二者の間に関係ができ、二項関係が始まります。もし、赤ちゃんが話すならば、「わんわんがいる。」と言って、自分の中で満足していることでしょう。



叙述の指差しの頃、自分が心動かされたものをお母さんと共有したくてお母さんの顔を見るようになり、子どもとお母さんと物の間に関係ができることで三項関係が始まります。もしおしゃべりしてくれるならば、「お母さん見て、わんわんがいるよ。」と、この感動を分かち合いたくて伝えてくれることでしょう。

この三項関係が、自分の中にある気持ちを人に伝えること、すなわちコミュニケーションの手段としてのことばの土台になるのです。

人と関わる力

三項関係は、コミュニケーション力獲得の第1歩です。お母さんが見ているモノを見ようとする「視線追随」や、自分の行動を決定するためにお母さんの表情を参考にする「社会的参照」のように、「共有すること」が必要な力は三項関係ができていることが前提になります。

人と関わる力が弱いと言われても、順調に力をつけてきても、誰かに何かを伝えたいという気持ちを育てるためには、一緒に遊ぶことで楽しさを「共有する」ことが一番大切な事です。

ミニカーをズラっと並べているわが子を見て、楽しさが分からないわと思われたとしたら、まずはお母さんもお父さんも同じことをしてみてください。楽しさそのものは分からなくても、お子さんは同じことをしていることに気づきます。そしてミニカーを手渡しながら「はい、どうぞ」と声をかけ、一緒に眺めて「すごいね」と言う。そうやってお子さんの遊びに親が積極的に関わることで、最初は一方的だとしてもコミュニケーションが生まれます。

お子さんの世界にゆったりと寄り添い、気持ちの共有を積み重ねていくうちに、物とお母さんお父さんを交互に見るようになり、叙述の指差し・三項関係へと進んでいくのです。

